

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
 教科名 (国語)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	<ul style="list-style-type: none"> ○板書や他の生徒の意見、授業での気づきや感想を書くことができる。 ○<u>正確な表記</u>が苦手である。 ○自分の考えを明確にもち、分かりやすく主体的に表現することが難しい生徒がいる。 ○暗唱や宿題など課題を達成できない生徒がいる。 ○漢字テストや記述力に差がある。 	/	<ul style="list-style-type: none"> ○話す・聞く：おおむね目標を達成している。 ○書く：材料を集めることはできる。正しい表記で文章化するのが困難な生徒がいる。 ○読む：おおむね目標を達成している。学校図書館を積極的に活用している。 ○言語：小学校で学習する漢字も読み書きともにできない生徒が多い。
第二学年	<ul style="list-style-type: none"> ○800字程度の文章は書ける。しかし文の成分の照応が正しくできない生徒がいる。 ○文法や伝統的な言語文化の学習を得意、好きと感じる生徒が7割以上いる。一方で演習を繰り返しても理解できない生徒もいる。 ○漢字テストや記述力に差がある。 ○授業中に意欲的に発言できない生徒がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○関心・意欲・態度が95.8%で東京都の平均を0.9%下回った。関心・意欲を引き出し態度を向上させる指導が課題である。 ○読む力が46.4%で東京都の平均を9.5%下回った。朝読書の推進、授業内の読む力を育む指導が課題である。 ○話す・聞く力が都を1.6%、書く力が1.2%、言語が1.1%上回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話す・聞く：おおむね目標を達成している。 ○書く：伝えたい事柄を明確にするために、文章の構成や描写を工夫して書くことができない、または工夫することに意欲的になれない生徒がいる。 ○読む：文中の根拠をもとに内容を読み取る力が不足している。 ○言語：おおむね目標を達成している。
第三学年	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭学習、苦手な単元にも積極的に取り組む。 ○「説明文の読み方」を活用して教科書の文章を読むことができても、入試問題で活用できない生徒がいる。 ○授業中に意欲的に発言できない生徒がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「主として知識」では正答率83%で東京都79%、全国77.4%を上回った。 ○「主として活用」では正答率77%で東京都74%、全国72.2%を上回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話す・聞く：おおむね目標を達成している。 ○書く：論理の展開を工夫し、説得力のある文章を書くことができる生徒が少ない。 ○読む：学んだ「読み方」を活用した長文の読解ができない生徒がいる。 ○言語：おおむね目標を達成している。

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
 教科名 (社会)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	社会科の授業への意欲は個人差はみられるが、おおむね良好である。ノートを取り、ワークシートをまとめ、確認の問題を解き、点検カードをまとめることはできている。問題解決学習ではグループでの話し合い学習活動はできるが、自分の言葉で要点をまとめ、発表する力はまだ不十分である。	6月の定期考査は地理的分野と歴史的分野の出題であったが、学年平均点は63点であった。観点別では、思考・表現問題は67%、資料活用問題は57%、知識理解問題は65%の正答率であった。資料活用が全体平均より5%下回った。	観点1：授業への意欲を社会への関心につなげる学習活動が必要である。 観点2：地図や資料から分かることをまとめる作業などを通して、思考力を伸ばす学習活動が必要である。 観点3：レポートを書く活動や、班活動で班の意見を発表する活動を増やす。 観点4：継続的に復習を積み重ねていく。
第二学年	社会的事象に対して、興味・関心をもつ生徒は増えてきている。ノートの作成やワークシート・確認プリントの取り組みは真面目であり、基礎的な学力が定着してきている。自分の意見をまとめ、発表する力も徐々に向上してきている。	都学力調査Aの正答率は本校が55.5%、都が56.6%と本校は少し下回ったが、学力調査Bの正答率は本校が56.6%、都は54.9%と1.7%上回った。観点別の関心・意欲・態度は、都より3.9%高いが、技能は2.5%低かった。読み取る力は、都を5.5%上回った。	観点では、教科の内容の技能が少し低いので、地図や資料から事象を読み取る学習を強化していく。また、合わせて必要な情報を正確に取り出す力の育成を図る。 読み取る力や解決する力は、今後もグループ学習を通して育成していく。
第三学年	理解力に優れる生徒に女子が多く、男女の学力差がみられる。全体的に学習課題に対して自分の考えをまとめ、グループで話し合い、発表することはおおむねできる。他者の意見に対して、根拠(資料などの史実)をもって批判できる力を伸ばす必要がある。	区学力調査の結果は、本校平均正答率は48.8%で、区の52.1%、全国の55.4%より下回っている。基礎と活用の正答率では、活用が大きく下回った。また、領域では地理的分野の「世界と日本に地域的特色」と「身近な地域の調査」の領域の正答率が特に低かった。	観点では、「資料活用の技能」、「社会的な思考・判断・表現」、「社会的な事象についての知識・理解」の順で観点別正答率が低かった。また、基礎と活用を比べると活用が劣るので、授業ではより資料から内容を読み取り、自分の言葉でまとめていく力の育成を図る。

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
 教科名 (数学)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の学習内容の理解、定着の差が大きい。(分数はもとより、小数の計算ができない生徒が多くいる。) そのため、課題や宿題への取り組みにも、個人差が目立っている。 ・授業では、多くの生徒が、意欲を持って学習に取り組んでおり、落ち着いた環境の中で実施されている。 	<p>実施せず</p>	<p>約3ヶ月の授業の様子から見ると</p> <p>(内容) 分数の計算、小数の計算、速さ、割合、四則の計算の順序等で定着の弱い生徒が目立つ。</p> <p>(観点) 関心・意欲は全体的に高い。小学校での「練り上げ」をずっと経験してきたからか、提示された題材をじっくり考えたり、いろいろな見方で見ようとしたりすることはできるが、「技能」が定着していないので、答えにたどり着かなかったり、反復練習を軽視する傾向がある。知識については普通程度。</p>
第二学年	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次と比べ、問題へと取り組む姿勢が、受け身になってきている。 各単元の内容が複雑、かつ拡張してきていることに挑みかかり切れていない様子が見かけられ、早急の転換が必要。 ・基本的には、学習していこうとする態度は、ベースに持っているので、「解ける」と言う自信につながる授業進行を心がけたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A教科の内容は、4観点とも、都平均より下回っていた。 特に「技能」が6 point 低く、大きな課題と言える。 ・B読み解く力は、都平均より若干上回った。特に、「取り出す力」は、15.1 point 高かった。 ・AとBの合計の結果は、都平均より2.7 Point 下回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・技能について、ドリル形式の時間配分を多めに設定していく。単に「宿題」とするではなく、授業進行の中で、解法練習とその確認をこまめに行う。 ・全般的にも、問題に挑む意欲と解ききる粘着力を意識した授業展開を進めていく。そのために例・例題も設問に準じるよう進め、解法の徹底的な確認と、反復練習をより多く配置していく。
第三学年	<ul style="list-style-type: none"> ・全般的には、最高学年としての自覚も出ており、復習にも取り組んでいる様子が見られる。 ・それぞれの進路を見据えた、学習スキルを意識しているものも増えている。 ・全体的な意欲のトーンを大切に、個別対応、全体指導を複合して、指導に当たっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の調査結果より、A(主として知識)では、ほぼ都平均と同じ(-1 point)。B(主として活用)も、同様(+1 point)。 ・観点別では、「Aの技能」が、-2.7 point 低かったが、「Bの技能」では+2.9 point 高く、「Bの知識理解」も+3.3 point 高かった。また、「Aの知識理解」と「Bの見方考え方」は、差異がほとんどなかった。 	<p>3学年という、中学校のまとめのとしでもあるので、各単元の内容に沿いながらの総合的な復習を加味していく。</p> <p>学力調査でも明らかになった領域毎の得手不得手を解消していく。特に、資料の活用の領域を梃子入れしていく。</p>

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
教科名（ 理科 ）

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	<ul style="list-style-type: none"> 定期考査の平均点は、73.4点であり、基本的な知識を問うものが多かったので、授業での学習内容を理解していれば答えられる問題であった（毎年のことであるが、1学年当初の生物の内容は、生徒にとって比較的取り組みやすい）。ほとんどの生徒は、課題に集中してとりこんでいるたで基礎的な内容は身につけていると思われる。 組の評定平均が A 組 3.48、B 組 3.24 で、組間の差がやや大きい。 科学的知識が断片的であり、それぞれの知識の関連性をもとに、総合的に理解していくことが課題である。 	<p>定期考査の結果を考察する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 科学的な知識は、到達目標に対して 71%（女子は 77%）の達成である。 科学的な思考については、70%（71%）の達成率である。 実験、観察の技能は 74%（82%）の達成である。全体に女子の達成率が高い。 自ら考えたり、科学的な思考力に関する問題への取り組みがやや不十分である。 	<p>定期考査、ミニテスト、実験、観察のレポート、理科ノートの取り組みなどを総合的に見ると</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎基本の事項の定着がやや不十分で（ミニテストの平均達成率 63.9%）で、繰り返し学習する習慣がやや不足していると思われる。 科学的事象を発展的にとらえたり、想像力をもって思考することが課題である。 小学校の理科学習の状況（入学当初のアンケート）から、理科が苦手という生徒もやや多く、科学への関心を高める指導の工夫が必要である。そのためには、実験・観察の機会をおおくする。マルチメディアの教材（NHK for school など）を多用する。

<p>第二学年</p>	<p>・定期テスト I の平均点は 65 点(昨年度 56 点、一昨年度 66 点)である。問題の難易度に差はあるが、現 3 年生と比較すると、学習意欲がわずかだが見られると感じる。事前の課題量は大変多いが、しっかりとやる者は数名いる。しかし多くの者が諦めている。学習意欲が見られない者あるいは授業中何をしたら良いのか理解できない者が男女とも数名存在する。また逆に極めて思考に切れが見られる者は確認できない。</p> <p>・都の学力調査の結果は 56.0%(昨年 56.6%)と都平均 56.6%(昨年 54.8%)より 0.6%(昨年 1.8%)低い。</p>	<p>都の学力調査の結果から</p> <p>・A 教科の内容は 57.5%昨年 58.6%)で都の平均値 57.2%(昨年 57.7%)より 0.3%(昨年 0.9%)高い。(一昨年度 1.1%高い)。</p> <p>・B 読み解く力は 50.7%(昨年 49.7%)で都の平均値 54.6%(昨年 45.3%)より 3.9%低い(昨年 4.4%高い。一昨年度 1.4%高い)。</p> <p>・A と B の合計は 56.0%(昨年 56.6%)で都の平均値 56.6%(昨年 54.8%)より 0.6%低い(昨年 1.8%高い。一昨年度 1.2%高い)</p> <p>・観察したり実験したりする授業が多いからやお互いに意見を出し合ったり、学びあったりする授業が多いからが 65.8%で一番多い。</p>	<p>・関心・意欲・態度は 91.7%(昨年 91.7%)で都平均 89.0%(昨年 90.4%)より 2.7%(昨年 1.3%)高い。思考判断表現は 47.4%(昨年 55.8%)で都平均 48.3%(昨年度 57.2%)より 0.9%低い(昨年度は 1.4%低い)。技能は 81.2%(昨年度 70.4%)都平均 74.6%(昨年度 67.4%で+3%で)より 6.6%高い。知識・理解は 53.7%(昨年度 50.8%)で都平均 54.2%(昨年度は 49.6で 1.2%高い)0.5%低い。取り出す力は 81.2%と都平均の 78.5%より 2.7%(昨年 68.5%で都平均の 60.1%より 8.4%高い)高い。読み解く力 27.1%(昨年度 32.4%)で都平均の 31.6%(昨年度 30.2%で 2.2%高い)で 4.5%低い。解決する力は 43.8%(昨年度 48.1%)で都平均の 53.7%(昨年度は 45.4%で 2.7%高い)より 9.9%低い。</p>
<p>第三学年</p>	<p>・定期テストの平均点は 57 点(昨年度 65 点(一昨年度 57 点)であり、同じような問題であり、難易度も変わらないが昨年度より 8 点下降した。</p> <p>・週 1 回の探究実験の授業には大変興味を持ち積極的に参加しているが途中で実験を諦め新しい実験に乗り換えるところも出ている。自ら考え実験を組み立てていく能力に欠ける生徒が昨年より若干多いと考える。しかし、中には主体的に考え着実に実験を進めていく生徒達もおりとても楽しみである。</p>	<p>・練馬区学力調査の結果、全体の平均正答率は 53.7%で昨年度の 46.5%より 7.2%上昇した。全国は 59.8%で 6.1%低い。区平均は 55.3%で 1.6%低い。活用に関する問題は正答率が 55.1%で全国平均より 3.9%低い。区平均より 0.7%高い。</p>	<p>化学変化に関する問題は 67.6%で全国平均より 3.0%高く、電流の性質は 66.0%で 16.7%高い。観点別の正答率を見ると観察・実験の技能に関しては、本校は年間を通し、35 時間探究的な実験授業をしているにもかかわらず 50.1%でありそれに対し全国は 61.5%で 11.4%も低い。実験中心に生徒が能動的に協同的に実験を組み立てて 1 年間かけて探究しているにもかかわらず、国が望む能力とはかけ離れていることを示す。実験・観察の技能とは、生徒が主体的に探究をしても知識としての技能を国が求め続けている限り正答率は上がらないであろう。</p>

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
 教科名 (英 語)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	多くの生徒が意欲をもち、授業規律正しく学習に励んでいる。自己紹介など既習事項を使って、自分に関することを英語で積極的に表現している。	定期考査Ⅰに関して、総合的にみると、9割以上の得点は約30%、7割以上の得点は約35%であった。リスニングに関しては約半数の生徒が満点であった。一方で、「表現の能力」に関する問題の得点率が低い傾向にある。	英語を聞いたり読んだりして理解する力はあるが、英文で表現する力が不足している。
第二学年	多くの生徒が授業に前向きに取り組んでいる。学習習慣が身に付いている生徒と付いていない生徒の二極化が見られる。家庭学習を習慣化することが課題である。	都学力調査の結果、都平均65.0%に対し校内平均66.8%、「教科の内容」は都平均65.3%に対し65.0%、「読み解く力」は都平均63.7%に対し72.9%であった。「関心・意欲・態度」では都平均を8ポイント下回った。	知識、理解に関しては向上がみられるが、外国語表現に関しては改善が必要である。読み取る力は今のところ充分身につけている。
第三学年	多くの生徒が授業に前向きに取り組んでいるが、学習習慣が身に付いている生徒と付いていない生徒の二極化が見られる。 新出事項の習得や言語活動に積極的に取り組む生徒が多く見られるが、基礎的な技能の習熟に差があり、読み解く力や表現力に差がある。	全国学力調査の結果、目標値を下回るものは無かったが、書くことに関する問題の正答率は他に比べると低い。	領域別の観点では、「読むこと」に関する力はあるが、「聞くこと」と「書くこと」に関する力が不足している。リスニングと英作文の力を伸ばす必要がある。 「外国語理解の能力」は比較的高いが、「外国語表現」の能力が不足している。